

「本土復帰」40年と沖縄の現在

新垣 誠

反安保表では、反「昭和の日」実行委員会と共催で、「60年目の『沖縄デー』に植民地支配と日米安保を問う」と題する集会を四月二八日に行った。講師は、新垣誠さん（写真家、沖縄NGOセンター代表）と太田昌国さん。お二人の発言を編集部で要約してご紹介いたします。ただし、新垣さんのお話の大部分は、ご自身の撮影したスライドを上映しながらのお話であったため、スライドを掲載できないこの紙面ではその分をほとんど割愛せざるを得ず、お話の始めと終りの部分のみをまとめています。ご了承下さい。なお、太田さんのお話も含めて、講演の全体は、八月中旬に刊行予定の『運動へ経験』35号（反天皇性運動連絡会編集、軌跡社刊）に掲載される予定です。こちらもぜひ読んでいただくことを願います。（文責・編集部）

* * *

ピラの肩書には、写真家、沖縄NGOセンター代表と書かれています。普段の生活の糧は沖縄キリスト教学院大学というかつて平良修先生が学長を務めた大学で、平和学を担当しています。

土地の記憶として戦争

今日沖縄は梅雨入りしました。この梅雨の季節のなると沖縄の人びとが思い出すのが、沖縄戦の記憶だと思えます。ちょうどアメリカ軍が上陸して来て、梅雨が明ける頃、六月二三日というのを迎えるのが毎年沖縄です。

沖縄の戦争を体験したご老人の中には、ちょうど今頃、デイゴの花が咲く季節になると心が落ち着かない、という方がおられます。梅雨の季

節になると、沖縄では「ちもあさーさー」とか「ちむさーさー」と言うんですが、何か落ち着かない感じがする。それは長年沖縄の土地に刻印されてきた戦争の記憶というものが未だに消えずに生きているからだろうと思います。今日の「植民地支配と日米安保」という話ですが、この日米安保が生きている限り、自分は沖縄の戦後は終わっているとは思いませんし、日本の戦後も終わっていないというふうに考えています。

もう一つ、土地の記憶として、自分は那覇市首里真和志町に住んでいるのですが、首里高校の二間隣り位です。自分も首里高校出身なんです。この学校から熱血勤皇隊として、先輩たちが戦争に向かって行きましたが、その首里高校で、今年になって二回、不発弾の撤去処理のために避難させられました。朝の八時半から。非常に不愉快な思いで。日曜日だったんです。両方とも。去年も十月だったか、ありました。首里高校は改築中で、グラウンドに校舎を建てるため掘り返したら、そこから不発弾が十何発も見つかっているのです。

首里は、三二軍司令部の壕が首里城のすぐ下にあり、激戦区だったんです。自分が五歳くらいの時でしたか、家の前の道を工事していたら、そこから不発弾が見つかったり、そういうのが日常茶飯事です。小さい頃、週末は家の近くの払い下げやでクレーション（戦闘糧食）を買って、弁当代わりにそれを持って、首里城の隣にある龍潭池に行つて土を掘り返して、ライフルの弾を見つけてそれをコレクションするというのが、友だちとの週末の遊びでした。そういう感じで、土地に刻まれた記憶というのも沖縄は非常にあるわけです。

デイゴが咲く季節になると、沖縄戦を思い出して落ちつかないという話をしましたが、そういうどこか言葉にならないものを、写真を使って表現できないかなというふうに感じています。

日本に再併合された四〇年

今日のテーマにあるいわゆる『本土復帰』というのは、自分は日本政府に再併合された四〇年と考えています。四〇年という節目を迎える沖縄では、去年の一月から今年の一月に至るまでの間いろいろんことが起きていました。普天間基地の代替施設を辺野古沖に作るための手順の一つとなる環境アセスの環境影響評価書の提出が強行されました。その少し前に、前沖縄防衛局長の「犯す前に犯すという人がいますか」という暴言があった。環境評価書にまつわる聴講会も開かれました。

年末の二七日に、那覇防衛支局が影響評価書を持ってきたのです。それも全部そろっていない、中途半端にしか持って来なくて、誰が届けたのか、朝の五時に持ってきたんです。県庁の守衛口にもちゃんと提出もしていないので、基本的にはぶん投げられた宛名がないゴミなんです。その残りをまた持つてくるだろうということで、年末年始の間ずっと県庁で座り込みをしていました。二〇一二年は、県庁に東守衛口で皆で乾杯して「あげましておめでとうございませう」をしました。

沖縄の今の雰囲気というものを皆様にお伝えするべく、そうした一連の動きをその時の写真を撮ってスライドにして持つてきましたので、それを見ながらお話ししたいと思います。

* * *

同列ではない原発と沖縄の基地問題

3・11以降沖縄に移住してきた人がたくさんいるんです。でもその人たちで自分たちの活動で凄く先鋭化している所があって、自分たちだけ先に行つて沖縄の人たち置いてきぼりみたいなのがずつとあった。自分も3・11以降、脱原発で活動に加わつていろいろやつて来たんですけども、一つ感じるのか、お互いに対話を紡いでいく中で、避難してきた方々は一杯一杯なんです。自分たちの問題で。だから沖縄の事まで耳を傾ける余裕がないという感じなんです。そうしているうちに沖縄の

人たちは、なんか淋しい気持ちになつていつてという雰囲気の中で、どんどんどんどん溝が深まつて行つた。3・11後半年とか、そういう節目の時に沖縄でも同じように、誰かの暴言があつたりとか、そういう問題が起きていたんです。そういう時にお互いに手を取り合えない哀しさというか、分かれ合えないみたいな、そういうのがある中で、こういう家族（スライドに映っている家族・編集部）はそれでも沖縄の問題に向き合つていくし、沖縄も原発の事とかを真剣に考えようよという話が出て来た瞬間でした。これも大海日です。

基本的には、沖縄の問題と原発の問題は違ふと私は思っています。共通点も確かにたくさんありますが、「植民地支配と日米安保」という歴史的背景を考えた時に、原発は沖縄の基地問題とは同列には語れないなと思います。

しかし原発というのも、日本の国の中にありながら沖縄が避けて通れない問題というのは、瓦礫です。大量の瓦礫を沖縄に持つて来て、沖縄で焼却しようという話があるわけです。那覇市がすぐ受け入れを表明しました。理由があつて、那覇市が巨大なゴミ処理場を、隣の南風原町に十何年前に作つたんです。その当時は那覇市でゴミが大量に出ていたんです。それから那覇市は頑張つてゴミの数を減らしたんです。いま問題は何かと言うと、この巨大な焼却炉を動かすには、一定のゴミの量が集まらないと稼働できないんです。だからゴミが必要なんです。だから瓦礫ゴミを受け入れた。那覇市議の人から聞いた話です。人をバカにしていいのかみたいな話で、憤りを感じています。

強化され続ける日米安保への恐怖感

今回のテーマの日米安保を考えた時に、果たして沖縄の四〇年間って、何だつたんだろうと思うわけです。この先どういうふう展開していくのかわかりませんけれど、一つ言えるのは、日米の関係がどんどん強化されているということです。嘉手納統合案だとかなんだとか言いながら、最後はやはりアメリカは辺野古を作りたいというのがあつて、もちろん

それには、日本のいろんな企業が既得権を絡ませて金儲けをしようとしているという背景もあります。プラス、日米の関係が、軍事的にもそうですし、小泉政権の時もそうですが、経済的な、株とか金融もそうですが、同時に生きて共に死ぬみたいな、そんな関係までべつとりなつてしまっているような感じがして、それに対して危機感を感じます。今回も中国を牽制していろんな動きが出ている。経済ではTPPとかを考えたたりして。あんなの戦前のブロック経済の最悪の部分と、グローバル資本主義の最悪の部分とを引つ付けたような感じで、背後に見えるいろんな経済だけではない軍事の動きとか、そういうものを考える時に、ホントにこの先大丈夫かなという、怖い気がします。

日米が足音そろえて沖縄へ来る危機感

最近沖縄について感じるのは、今までは米軍反対みたいな部分が多かったのですが、それよりも増して最近怖いのは、日本政府の動きです。この前の北朝鮮がミサイルを打ち上げるからなんやかんやと言ってPAC3を配備したりしていますけれど、あの動きというのは教科書問題もそうですが、天皇が沖縄を訪問するとか、もっともつと遡っていけば、天皇が先島を訪問したりとか、そういう一連の動きから既に、中国を睨んでの沖縄の軍事化みたいなものが始まっていて、最近のことではなくて、



既に下敷きみたいなものは七二年より前から準備されていたのではないかなというものを、強く感じます。最近それがあからさまになって来ているなという動きを感じるわけです。

沖縄にとつては、一つは辺野古の新基地を絶対

ストップさせることですが、それに伴って与那国島の自衛隊受入れの話もあります。日米が肩を合わせて足音を共にして沖縄にやって来るという危険性を感じます。何よりも沖縄が映し出しているのは、日米安保というものが未だにどんどん強くなっていくだけで、国民を置き去りにして行って、国民を守るはずの憲法よりも日米安保を優先しながら政治が進んでいく恐ろしさを感じます。

自分は沖縄について沖縄と向き合う場合に、思想的なこともあるんですけども、自分のお爺ちゃんお婆ちゃんが戦争を体験して、お爺ちゃんはやんばるに首里から避難して、集めた食べ物を日本軍の兵隊に全部取られたりとか、壕の中に避難している時に壕の中にいた日本の通信兵に、「これを隣の壕まで持つて行け」と言われ艦砲射撃に只中でそれを持つて行つたりとか、家族はもう助からないなと思つたけれど無事に帰つて来たとか、自分のお父さんが破傷風にかかつて、まだ一〇歳だったけれども、この子はもう助からないと言われたりとか、自分のお父さんはお姉さんが二人いたんですけれども、戦争で命を落として自分を見たことがないお婆さんたちがいたりとか、後は自分のお婆ちゃんが戦後收容所にいる時に、米兵に集団レイプされ妊娠して、首里に帰つて来てそこで中絶をした話したとか、そういう話しが自分の家族の中や地域の中、それが例えば不発弾の処理がある時、また梅雨の時が来て真つ赤なデイゴが咲き乱れる度に、戦闘機の音がけたたましく通り過ぎていく度に、記憶というものは消えずに次から次へとよみがえってきます。

そういう記憶に苛まれ苦しんでいるのは沖縄だけではなくて、世界中を見た時に、沖縄から戦闘機が出て行く時に、その先で苦しんでいる人たちがいるということも忘れたくないなというふうに思います。

七二年から四〇年を迎えて、振り返って気持ち的にはすつきりしないことがたくさんあるんですけど、今回こういう所に呼んでいただいて皆さんとお会いできたことも、自分にとつて何か新しいことが始まるきっかけなのかなと思つて感謝して、話を終わらせていただきたいと思います。